

原文と現代語意識

温知政要

宗春ロマン隊

喜多川遊歩

目次

p. 2	目次
p. 4	序文
p. 7	第一条
p. 10	第二条
p. 13	第三条
p. 16	第四条
p. 19	第五条
p. 22	第六条
p. 25	第七条
p. 27	第八条
p. 30	第九条
p. 33	第十条
p. 35	第十一条
p. 38	第十二条
p. 41	第十三条
p. 43	第十四条

大きな愛と広い寛容の心で仁徳ある政を
愛に敵なし 権現様のように仁者であれ
冤罪は国の恥 罪科はとことん調べつくせ
継続は力なり 私欲に走らず、志を最後まで
学問の第一は愛情 小賢しい学問より自分自身に正しくあれ
適材適所 どんなものにもそれぞれの能力がある
好きこそものの上手なれ 他の者の心情を察するように
規制は必要最小限で良い 法令は少ないほど守ることができる
お金は活かして使え 過度な儉約省略はかえって無益になる
生かすも殺すも庶民の知恵 押し付けではなくまずは仲良く
ストレスなしが養生一番 怠けなければ心身ともに健康である
芸能は庶民の栄養 見世物や茶店などを許可する
先達はあらまほしきこと どんなことでも事情通であれ
芸道は偉大 あらゆる芸事を数年で身につくとは思わぬように

- p. 44 第十五条 若者への諫言には若気の至りをもつて 異なる意見は相手の年齢を考えて
- p. 47 第十六条 失敗は発明の母 大器量の者でも若い頃は羽目を外すことはある
- p. 50 第十七条 人の命は金では買えんぜ 生命は尊く、常日頃の用心が肝要
- p. 54 第十八条 何事も庶民目線で 世間の事情によく通じ深い愛情を示せ
- p. 58 第十九条 天下の政治は緩急自在で 国の改革はゆっくりと普段の用件は速やかに
- p. 61 第廿条 改革は文殊の知恵で 自分ひとりではなく良き補佐が大切
- p. 63 第廿一条 「まあええがやあ」が臣下に対する主君の心得
- p. 66 結文 古参新参・男女等を問わず平等に深く愛情を示せ
- p. 67 訳者あとがき

序文

古より国を治め民を安んずるの道は
仁に止るる也とそ

我武門貴族の家に生るといへとも

衆子の末席に列り

且 生質疎懶にして

文学に暗く

何のわきまえもなかりし中

幕府祇候の身となり

恩恵渥く蒙りしうへ

はからすも嫡家の

正統を受續き

藩屏の重職に備れり

熟思惟するに

天下への忠誠を尽し

先祖の厚恩を報せん事は

昔から国を治め民衆を安心させる道には
仁が肝要であると言われている。

私は武家の貴い一族に生まれたが

多くの子供達の中でも最後の順。

しかも、生まれもつての怠け者。

学問もそれほどしたわけでもないし

何の分別もなかったけれども

幕府のお役目をいただく身となり

多くの恩恵をいただいた。

さらに予想もしなかった（尾張藩）本家の

正統を受け継ぐこととなり

藩を守る重職に就かせて頂いた。

しっかりと考えれば

天下国家へ忠誠を尽くし

御先祖方の多くの恩に報いるために

国を治め安くし

臣民を撫育し

子孫をして

不義なからしむるより外有まし故に

日夜慈悲愛憐の心を失わす

万事廉直にあらん為

思ふるを其俣に

和字に書付け

一卷の書となして

諸臣に附與す

是我本意を普く人にもしらしめ

永く遂行ふへき誓約の証本なるうへ

正に上下和熟一致にあらん事を

欲するか為に云

享保十六辛亥三月中浣

参議尾陽侯源宗春書

自らの国（尾張藩）を治め安心させ

臣下や民をかわいがり大事に育て

子孫たちが

道から逸れないようにする他はない。

昼も夜もいつでも

慈愛と深い優しさの心をなくさずに

全てのこと

心正しくあるようにするために、

思うことをそのまま

誰もが読みやすい書き下した文で書いて

一冊の本として

諸々の臣下に渡すことにした。

これは私の本当の思いを広く人に知らせ

末永く行なっていくという

誓約の証本である。

まさに身分の上の者も下の者も

仲良く一つであるように願って

語るものである。

享保十六（1731）辛亥年

三月中旬（新曆四月下旬）

参議尾張藩主源宗春書

第一条 世の中明るい事が大事 大きな愛と広い寛容の心で仁徳ある政を

一夫人たる者

平生心に執守る事なくては

叶わさることなり

しかし其品多ければ

忘れ怠りやすし

一二字の中より

限なき工夫出る物なり

殊に国持たらんもの

すへずへまで行渡らすしては

あやる事多かるへし

故に慈と忍との二字を

懸物二幅にそらへ

慈の字の上には日の丸を描せたり

慈は心のうちにのみ隠れては

その詮更になし

そもそも、人は

普段から心に留めて

守らなければならぬことがある。

しかし、その数が多すぎると

忘れやすく怠けやすい。

多くを語るより一文字や二文字で

数多くの工夫ができるものだ。

特に国持ち大名は、

その思いが隅々まで行き渡らなければ

間違つた政治をしかねない。

だからこそ慈と忍の二文字で

二幅の掛け軸を作つた。

慈の文字の上には太陽を描かせた。

慈愛は心の中に隠しては

あまり意味がないからだ。

外へあらはれすえすへにも及び
隅々までも照したき心にて
大陽の徳をしたひての事なり
忍の字の上には月の丸を描せたり
堪忍は心の中にありて
外へ顕れざる時の工夫ゆへ
大陰の形を表せり
日月の二字を合すれば
則明の字也
大学の明德にも叶へきか
萬の事明らかになくしては
所まかふ事のみにて
宜く正理に叶ふやうには行れまし
駕輿道具の者の衣服には
仁の字を相印に申し付たり
駕輿道具の者の衣服には
仁の字を相印に申し付たり

その思いが外に顕れ、広く行き渡り、
隅々までも照らし出す心が慈。
大陽の徳のようであつて欲しい
という願いだ。
忍の文字の上には月を描かせた。
堪忍は心の中にあるもので。
外へ出すものではないので
太陰である月の形で表現した。
日月の文字を合わせれば
つまり明という文字になる。
『大学』に説かれる明德にも
かなっているものと思う。
あらゆることで明らかでないのならば
間違つてしまふことばかりで、
あたりまえに正しい道理に
かなうようにはならない。
駕籠や輿等の道具を持つ者の衣服には

是内に居ては慈忍の二字を見
外へ出ては仁の字を見
朝夕何方におゐても
暫くも忘れずして執行
勘弁止むまじき為の工夫也

仁の文字を記すように申し付けた。
このように、
内にあつては慈忍の二文字を見て
外に出たときは仁の文字を見て
いついかなる時も、どこに居ても
ほんのわずかでも忘れないように
執り行い
物事を考え定めることをやめないための
工夫である。

第二条 愛に敵なし 家康公のように仁者であれ

一和漢古今ともに

武勇知謀千万人に勝れし名将

其数限りなし

しかるに功業終に成就せずして

滅ひ失せ

子孫二代と續かさるは

慈仁の心なく

私欲さかんにして

自分の榮耀奢りを極め

人民を濟ふの本意

曾てなかりしゆへ也

東照宮には

内に寛仁の御徳そなはらせ給ひ

下々迄も御慈悲深く

御敵となりし者さへ

日本も中国も、昔も今も

武勇と知謀が、誰よりも優れた名将たちは

数限りなくいる。

しかしその功績が完成する前に滅び

子孫が二代と続かないのは

慈しむ深い愛情の心がなく

私欲に充ち溢れ

自分の榮耀榮華を奢りつくして

民衆を救おうという本来の心が

なかったからだ。

東照神君家康公におかれては

心に広く深い愛情のお徳が備われており

世間一般の者に対してまで慈悲深く

敵になった者さえも

心を入れ替えて心服すれば

心を改め服すれば
其罪をおゆるしなされ
義の為には御身を忘れさせ給ふ程の
明君にて渡らせられしゆへ
御子孫枝葉迄も
その徳行を受はかせられ
千万年かきりなき御治世は
昔王代にもまれにして
天下の政務武將の執行ひ
初しより以来
御當家の様に成
四方の隅々まで
物いひ少もなく
堅く御大法を守り
御仁政に服し奉りたる
目出度御世はなき事也
仁者に敵なしといへる古人の語

その罪をお許しになられた。
やらねばならない道義のためには
自分の身体のことを忘れるほどの
名君であられたので
子孫は傍流の末までも
その徳を受け継がせていただいている。
永遠に続くであろう幕府の政の世は
今までのどんな王朝にも殆ど無かった。
天下の政治を、
武家が執り行なうようになって以来
徳川家のように
四方の隅々にいたるまで
言い争うことが少しもなく
しっかりと法を守り
深い愛情あふれる徳ある政治に
心服されるような
めでたい世はなかった。

尤至極のことなるへし

「仁者に敵なし」という
古い時代の偉人の言葉は
もっとも当然のことである。

第三条 冤罪は国の恥 罪科はとことん調べつくせ

一国政の中に

万一あやまりたる事有ありても

忽あらため直す時は

本理にかなひて

其あやまちも消

宜しく成事也

只刑罪の者は

一旦あやまりて後には

何程悔ても

取かへしのならぬ事なれば

吟味の上何篇も念を入

大事にかくへき事也

たとへは千万人の中に

一人あやまり刑しても

天理に背き

国政の中で

万一失敗したことがあっても

すぐに改め直せば

本来の道理にかなって、

その過ちも消え

うまくいくものだ。

ただし、刑罪の者については

一度、間違つてまった後は

どれほど悔やんでも

取り返しのできないことであるから

吟味の上、何度も念を入れ

慎重にしなければならぬ。

たとえば、千万人の数多くの中で

たった一人誤つて刑に処しても

天の道理に背いたのであり

第一国持の大なる恥なり

不孝不義

并人を殺せし類は

其罪顕然たれとも

それさへ随分念を入れしまして

紛はしき罪科数々あるものなれば

何程も心を碎き

誰人にも尋ね問て

仕そこなひなき様に工夫すへし

勿論夫々の小過に至るまで

とくとあたるように勘弁すへし

平生よろしからぬと思ひたらむ者は

猶更心を用ひ

正理にたかはぬ様に

取あつかふべき事也

常々の好悪微塵にても萌すは

比興至極

第一に国を司る者として

大いなる恥である。

不孝者や道から外れた者、

ならびに人を殺すような者は

その罪はあきらかだが

それさえも念には念を入れて

紛らわしい罪科も数多くあるものだから

何度も何度も心を碎いて

様々な人に相談して

しそこないないように

工夫すべきである。

もちろん、それぞれの小さな過ちまでも

しっかりと対応ができるように

よくよく考えなければならぬ。

日頃から、よろしくないと思われる者には

なおさら気をつけて

正しい道理から間違わぬように

言語に述べられぬ浅ましき事なり

取り扱わなければならない。

常々に好き嫌いを

ほんの僅かにでも起こす者は

あまりにも下品で卑しいことであり

言葉にならないほど見苦しいことである。

第四条 継続は力なり 欲に走らず、志は最後まで

一世間の様子つらつら考へ見るに

何事にも用ひらるへき者

いまた志を得ざる初め程は

我こそ事を執行ふ役儀にも成たらは

上の御為も下の為にも

万の事滞らす

程よく仕て見せんと

心に思ひ 口にもいひなとして

もとかしきように申せとも

其職になるといなや

常々のこゝろとは大にたかひ始め

笑ひ譏りし人と

すこしもかはる事なく

還て前々の同輩の害に成事はかり

思慮するやうに成る事

世間の様子をよくよく考えてみると

どんなことでも用いられるべき人が

まだ志を得ずに

役職にも就かない初めの頃は

「私が事を執り行なう

役職に就いたのならば

上のためにも下のためにも

全てのこと滞る事なく

うまく仕事をしてみせるのに」

と、心に思い、口にも言つて

もどかしいように言うのだが

その職に就くやいなや

今までの心とは大きく異なり始め

自分が笑い誇ってきた人たちと

少しも変わらなくなつてしまい

かならず有るは

皆々私欲卑賤のこゝろから

思案かはる也

夫と同じく上たる者も

始の中は物珍らしく

世間へ賢君とも唱へらるへきと

随分つゝしみ行へとも

後にはそろそろ退屈の心出来て

政務も成あひに覚へ

あけもなく取乱す事なり

秦の始皇は 天下を一統せし程の

威光盛んに有しか

奢を極め 放埒千万の身持にて

後には愚昧至極に成て

長生不死の薬を求る様に成行

纒の年数の中に亡ひ

其外 漢の武帝 唐の玄宗なども

かえって今までの同輩の人たちを

引きずり落とすようなことばかり

考えるようになることが

必ずと言って良いほど起こってくる。

皆が皆、私欲の卑しい心から

考え方が変わってしまうからである。

それと同じように

既の上に立っている者も

最初は、物珍しいこともあつて

世間から「賢い方」と言われたいので

随分と慎み深く行つてはいるが

後には徐々に退屈な心が持ち上がった

政務も都合次第で動くようになり

理由もなく、だらしなくなる。

秦の始皇帝は 天下を統一できたくらい

人に畏敬されるような人であつたが

奢りたかぶり

初めの仕方とは
後に大に相違せしとそ
さあれは最初の存念工夫も
半はならざる内に
必くしけるものと見ゆる
つつしみおそるへき事也
故に古の人も
始あらずと云事なし
能終有事すくなし
と戒められしとかや

勝手な振る舞いをするようになり
最後にはとても愚かにも
長生不死の薬を求めようになり
ほんの僅かな年数で滅んでしまった。
その他にも漢の武帝や唐の玄宗なども
始めのふるまいと後のふるまいとは
大きく違うようになってしまった。
だからこそ最初の考えや工夫も
志が半ばにもならないうちに
必くじけるように見える。
慎み畏れ心せねばならないことだ。
だからこそ古き偉人は
「始めは必ずあるが、
よく終わることは少ない」
と戒められたのだ。

第五条 学問の第一は愛情 小賢しい学問より自分自身に正しくあれ

一学問といふ物は

第一聖人賢人の金言妙句を

見つけ聞つして

心を淳直にし

身の行ひをよろしく致し

古今の事に引渡り

才も働き

智も廣くせんか為なり

しかるに

心身のたしなみはわき急なし

邪智さかんに

口かしこくなりて

萬の事に理屈はり

人を譏りあなとり

上々の不出来者と成り

学問というものは

第一に聖人や賢人の優れた言葉を

見て聞いて

心をありのままに素直にし

身の行いを正し

古今のことによく通じて

才能を働かせ

智慧もひろくするためのものである。

それにもかかわらず

心身のたしなみを脇へ追いやり

よこしまな知恵を大きくして

口ばかり巧みになり

全てのことには理屈をつけ

他者を誇り侮り

まったくの不出来な者となり

付き合れもせぬ様にて

学問せざる以前

大に増なる者かならず有事也

是学問あしきといふにてはなけれとも

習ひ様あしく

教方もよろしからぬゆへと

見ふたりすれば

懋にかやうの筋の学問をせんよりは

生れ付の本心をうしなはず

正理にたかはぬ様にと工夫し

人にも尋ね問

一つ一つ心と行ひとへ

うつしたしなむへき事也

夫ゆへ古の賢人も

君父によくつかへ真実にさへあれば

一文不通にても

大学者也と申されしとかや

誰からも相手にされなくなり

学問をする前の方が

大いに立派であつた者が必ずいるものだ。

これは学問が悪いと

言っているのではない。

学問の習い方が悪く

教え方も良くないように見える。

だからこそ

なまじいに、このような学問をするよりは

生まれつきの本来の心を失わないように

正しい道理から外れないように工夫し

人にも尋ね聞いて

一つ一つの心と行いに

学問を反映させるようにすべきである。

それだからこそ古き時代の賢人たちも

「主君や父祖によく仕え

真実のままあれば

学問も致し
心行ひともによろしきは
申にも及はぬ事なれども
学問せねは叶はぬと
云事にもあるまし
殊に人の上たる者は
慈悲憐愍第一の学問と見へたり

一文に通じていないとしても
「大学者である」
と言われてきた。
学問もし、心と行いの両方も正しいことは
申し分がないが
学問をしなければならぬ
ということではない。
特に人の上に立つ者にとっては
慈悲憐愍こそが第一の学問であると思う。

第六条 適材適所 どんなものにもそれぞれの能力がある

一万の物何によらず夫々の能あり

先木材にていはゞ

松は松の用あり

桧は桧の用あり

其用々に随て用ゆれば

甚重宝になる事なり

松を用ゆへき所へ桧をつかひ、

桧をつかふへき場へ松を用ゆれば

其能違ひて役に立ず

人の使ひ様

猶似て同し理と覚ゆる

其子細は

人々の生れ付に得手不得手有り

自分の眼力

さては頭役たるもの目利にて

どんなものでも、それぞれの能力がある。

まず木材に関して言えば

松は松の使い道があり、

桧には桧の使い道がある。

その使い方に従って用いれば

とても重宝である。

松を用いるべきところで桧を用いたり

桧を用いるべきところで松を用いれば

その木の能力が

異なっていて役に立たない。

人の使い方はなおさら同じことが言える

それを詳しく言えば

人には生まれ持った得意不得意があり

自分自身に対する洞察力や

あるいは上司が

何役に成とも申付し時

其者の不得手なる職を致させては
持まへの才能曾て見えす

其時に至り

我眼力の明らかならざるか

頭人の吟味くはしからざるかと

自分省察の工夫は外になして

其者役にたゞざるやうに取ちかへ

一生捨り者の部に成行事

毎々ある事にて甚残念なる事也

しかれば其類は

又々外の役にうつし

用ひ見るへき事なり

何役に用ひても

よろしからざる時にこそ

其者の不才たる儀

明らかに知るへき事か

見分ける力を持ち合わせていて

何かしらの役職を申し付けられたとき

その人の不得意な役職をさせては

持ち前の才能が見えてくることはない。

その時になって

自分に対する洞察力が鈍かったのか

上司が詳しく知らべていなかったかと

自分自身の反省をすることはせずに

その人が役に立たないものと勘違いして

一生使いものにならないと

してしまふことも

よくあることで、とても残念だ。

だからこそ、そのような場合は

また別の役職に移して

用いてみるべきである。

どんな役職に用いても

うまくいかない時にこそ

其中に律儀一篇の者は

其程々の徳あり

唯佞姦にして

生地のあしきうへを

色々の物にてぬり隠したる者は

人をも損ひ

国の害に成事甚し

その人の才能がないということが
明らかになる。

その中でも、律儀一辺倒の者は

それはそれで徳がある。

ただし口先が上手で心が曲がり

性根が悪い上に色々と色を塗って、

その本性を隠している者は

人を傷つけてしまい

国にとっても害になることはなほだしい。

第七条 好きこそものの上手なれ 他の者の心情を察するよつに

一惣して人には好き嫌ひのあるもの也

衣服食物をはじめ

物すき夫々にかはるもの也

しかるを我好ことは人にもこのませ、

我きらひなる事は

人にも嫌はせ候やうに仕なすは

甚狭き事にて

人の上たる者へつしてあるましき事也

其中 うれしき事 いやなる事は

本心よりいつる事ゆへ

万人よりもかはらざるもの也

さあるうへは

我こゝろにうれしき事は

人もうれしかるへし

我こゝろにかなしくいやなる事は

概して、人には好き嫌ひがある。

衣服食物をはじめ

趣向はそれぞれに異なっている。

それにもかかわらず

自分が好きなことを他の者にも好ませ

自分の嫌いなことを

他の者にも嫌わせるようにすることは

とても狭い見であり

人の上に立つ者は

とりわけ、あつてはならない。

その中でも嬉しいことや厭なことは

心の奥底から出てくるものだから

すべての人にとつて

変わらないものである。

そうであるから

人も同じく
其通りなるべしと思ふ事のみ
たかふ事有まじ
古人の恕の道と申されしも
此心得たるべきか

自分の心に嬉しいことは
他の者も嬉しいだろうし
自分の心に悲しく厭なことは
他の人も同じように、
そうであるだろうと思うことは
間違つてはいないはずだ。
古き時代の偉人の
「思いやり、他の者の心情を察すること」
と言われたのも
これを心得たものである。

第八条 規制は必要最小限で良い 法令は少ないほど守ることが出来る

一万の法度号令

年々に多くなるに随ひ

おのつから背く者も

又多く出来て、

弥法令繁煩はしき事に成たり

かくの様子にて数十年を

経るならば

後には高声にて咄しする事も

遠慮あるやうに

成ましきものにてなし

其外一切の作法

諸役所の取扱までも

右の通りなれば

上げ句には

夜寝る間もなきやうに成行んか

あらゆる規制法令が

年々に多くなつていくと

自然にその法令に背く者が

また多く出てきて

ますます法令が多くなり

煩わしいことになる。

このような様子で数十年経てば

ついには大きな声で話をすることも

遠慮しなくてはならなくなるだろう。

その他にも、

全ての作法や諸々の役所での取り扱いも

右のとおりなので

拳句の果てには

夜も寝ることができないようになつていくのではないか。

第一法令多く過れば
人のこゝろいさみなく
せはくいしけ
道をあるくにも
跡先を見るやうに成り
常住述懐のみにてくらし
自然と忠義のこゝろ
うすく成間敷ものにてなし
さあれは其品其品をとくと考へ
人の難儀指支にもなるへき事
瑣細なる類は
除き止るやうに仕たきもの也
万の取あつかひすくなければ
勤る事も守る事も仕やすく
法度の数減すれば
背く者も稀にして
心も優に

第一に、法令が多すぎれば
人の心も勇氣がなくなり
狭量になつて、いじけてしまい
道を歩いていても後先を見るようになつ
て
変わることもなく愚痴ばかり述べて
暮らすようになり
自然と忠義の心が
薄くならないとはいえない。
だからこそ一つ一つの内容を
しっかりと考え
人の難儀や差し支えになつてしまふ事や
とるに足らないような法令は
除いて止めるようにしたいものだ。
あらゆるものの規制を少なくすれば
勤務することも
法令を守ることもしやすくなり

諸芸もはけみたしなむやうに
成へきか
和漢ともに
事の多く成り法度の繁は
よろしからぬ事とこれ有よし

法令の数が減れば
その法令に背く者も減って
心も優しくなり
諸芸にも打ち込むようにな
るのではないだろうか。
日本でも中国でも
多枝に渡って法令が多くなっ
ていくのは
良くないことである。

第九条 お金は活かして使え 過度な儉約省略はかえって無益になる

一省略儉約の儀は

家を治るの根本なれば

尤相つとむへき事也

第一国の用脚不足しては

万事さしつかゆるのみにて

困窮の至極となる

さりなから

正理にたかひて

めつたに省略するかかりにては

慈悲のこゝろうすく成りて

覚えすしらすむの

不仁なる仕方出来して

諸人甚痛みくるしみ

省略かへつて無益費と成事あり

山海に自然と生し田畑に蒔植

省略や儉約は

家を治める根本だから

もつともしつかりと務めるべきものだ。

第一国の仕事で費用が不足しては

あらゆることでさしつかえてしまい

困窮の極みとなってしまう。

そうであっても

正しい真理から外れて

やたらめつたに省略するようになっては

慈悲の心が薄くなってしまう

知らず知らずに

深い愛情のない振る舞いとなり

民衆がとても苦しみ

省略することで、

かえって無益な出費となることがある。

其外諸職人の手にてこしらへる類
限りなき万物其程々のあたひあり
余りにきひしく棹を入

きんみ過れは

其品々うすく匱相に成て

一度こしらへ

二年三年も用ひらるへきもの

壺ケ年の中に幾度も

仕替候はねばならぬ様に成り

積り積りては大きな費に成る事

毎々有事也

さあれはとて吟味すへき程は

随分かんかへ申付へし

たゞ過不及なきやうに心を用ひ

人の益にもならぬ奢をはふき

一つ二つにて済候物を

数多くこしらへ

山海に自然に生じ

田畑に蒔いたり植えたり

その他、職人が手で作るような物は

数限り無いものがあり

それぞれに価値がある。

あまりにも厳しく検査し吟味し過ぎれば

品々が薄つぺらな粗悪な物となり

一度作れば二年三年と使われるべき物も

一年のうちは何度も

作り替えねばならないようになり

積もり積もつては

大出費となつてしまうことがよくある。

だからこそ吟味するときは

しっかりと考えるように

言い伝えなければならぬ。

ただ過不足がないように心を使い

人のためにならないような奢りを省き

いまた用ひらるゝ物を
むさとあらため申付る類
常住平生の事に勘弁工夫有度事也
ふと心得違ひては
諸人の痛みなけきに成事顯然たり
それゆへに聖人の詞にも
用を節して人を愛す
とありて
何事もふまへ所のなくて
叶はぬ事と見えたり

一つ二つで済むような物を数多く作って
まだ使っている物を
わざわざ改めるように
言いつけるようなことは
常日頃から考え工夫をしたいものだ。
簡単に考え違いをしては
庶民の痛みや悲しみと
なってしまうことは明らかだ。
だからこそ古き時代の偉人の言葉に
「節約をして人を愛する」
とあり、
どんなことでも思案しなくては
ならないとされている。

第十条 生かすも殺すも庶民の知恵 押し付けではなくまずは仲良く

一 よろしからぬ事にてても

年数久しく経れば

定りたる法の様に成りて

目にも耳にも染み付

気のつかぬもの也

あしき臭気は

しはらくもこたへられぬ物なれども

年月馴ては

脇にて思ふ程は

苦にならぬと見ゆる

一切の事も其通りにて

あしき事を改め

宜しき筋に直りて

古来の作法に立もどる類ひの事も

心に服せず色々と批判し

良くないことでも

年数が長く経つと

決まっている法のようになって

目にも耳にも染み付いて

気がつかなくなってしまう。

悪臭は少しの間も耐えられないものだが

年月が過ぎ去り慣れてしまふと

周りが思うほど

苦にならなくなってくるものだ。

すべてのことがその通りで

悪いことを改め良い道筋に直して

古来からの作法に

立ち戻るようなことなのに

心から納得せず色々と批判し

迷惑になるように思うこともあるものだ。

めいわく成る様におもふ事も有べし
大食大酒淫乱我儘にくらせし者は
身を失ひ家を損ふ第一なれども
これより能事はなきと覚へ
身の養生より初め
心行ひのたしなみは
人間長久の至極なるを
さてさてめいわくきうくつなる事と
心得たかふと同じ事也
何程能き事にてても評判の仕様によりて
色々に申さるゝ物也
さあれば上中下共
和熟一致になくしては
善行も成し遂がたしと
思はるゝ事也。

大食、大酒。淫乱。わがままに暮らす人は
身体を損ね、家を滅ぼす第一である。
これより良いことはないと思ひ
身体の養生から始まり
心と行いに關して
常日頃から考えることが
人が長く久しく栄える究極である。
どうしたものか、
それを迷惑で窮屈であると
思い違いをすることと同じである。
どんなに良いことでも
評判のありかたによつて
色々と言われるものだ。
だからこそ上中下全ての身分の者が共に
仲良く一致することがなくては
善い行いも完成しないものと思はれる。

第十一条 ストレスなしが養生一番 怠けなければ心身ともに健康である

一昔も今も

人の生れて受得たる所の気血は
さしてかはる事もなきと見ゆる
古へも七十に及ひたるものは
老人といひ

四十五十ばかりものは老人といはず
今とても同じ事也

しかるに近來の十六七より
廿にも成たる若き輩を見るに
多くは顔色も悪く氣根うすく見へ
寒暑にも一番にあたり
すこし食をくい過れば腹中つかへ
かりそめの事にも薬たけく
口上にも只よはりたる事のみにひて
くらす様になりたり

昔も今も人が

生まれ持つてきた生命力の源は
それほど変わつてはいないように見える。
昔も七十歳になつた人は老人といひ
四十五十歳くらいでは

老人とは言わなかつた。
今も同じである。

しかし最近の十六・七から二十歳位に
なつた若い人達を見ると
多くは顔色が悪く
根氣があまりないように見え
寒い暑いという氣候にすぐに体調を崩し
少し過食するとお腹を壊し
たいしたこともないのに薬を多用し
話をするときも、

是幼年よりの育てやうわるく
持なしあしくて

はやく樂を仕たかる心出来るゆへ也
かく有ゆへ平日の所作も

つやかさりの様に成りて

内心常にくるしく

人の見ぬ所にては

還て乱行不養生甚しく

強く盛んになるべき時節を

取失ふ事也

農業をつとめ

其外かろき世渡りの者は

朝より暮まで骨を折事甚しけれとも

心の中やすきにより

すくれたる長命の者もてき

とれとれも其身健か也

此所人々能かゝりみ勘へて

ただ身体の弱ったことばかりを言つて
暮らすようになった。きた。

これは幼い頃の育て方が悪く

振る舞いが悪く

早く樂をしたがる心ができるからである。

そのために常日頃の振る舞いも

つやかざりのように表面だけ飾つて

心の中は常に苦しく

人が見ていないところでは

かえつて乱行と不養生がはなはだしく

強く盛んになる時期を

失つてしまつてゐる。

農業を営んだり

その他でも身分が低く生きてゐる人は

朝から晩まで精を出して働くことは

尋常ではないけれども

心の中は安らかで

生れ付のきやう不器用愚鈍發明は
是非に及はず

唯面々に我勤むへき事をさへ

大切に怠らされは

心のくるしむ事もなく

何方にても安樂なる事と思ふへし

寒き目に逢ねは暖かなる事をしらす

空腹なる時には

平日の食物も各別うまく

身につく様に覺ゆる類

心の持ちやうの手ちかき工夫なり

きわだつて長生きの者もでき

皆が皆、その身体は健康である。

このことを人々はよく省みて考え、

生まれつきの不器用や愚鈍聰明は

どうしようもないことだが

ただ各々が

自分のしなければならぬことを

しっかりとし、なまけなければ

心が苦しむこともなく

どこにいたとしても安樂である。

寒い目に逢わなければ

暖かいことを知らないし

空腹であれば

常日頃の食事でさえも特別に美味く感じ

身についていくように思えるのと

同じように

普段からの心の持ち方次第である。

第十二条 芸能は庶民の栄養 見世物や茶店などを許可する

一 神社仏閣破損し并道橋修覆

或は其所々衰微し

難儀に及ひたる時

其願ひの品とくと聞届吟味のうへ

様子によりて勸進能相撲

其外少々の見せ物など

日をきりて免許し

又は神社参詣の路次などには

諸人飢渴をしのくか為

相応の茶店餅豆腐の類

販売候場所をもゆるし置事也

段々繁昌におもむき

下々の潤ひにもなりかゝり候時分

かならず雑人のみかは

わかき諸侍の

神社仏閣が破損し、

または道路や橋を修理したり

あるいはその場所が衰微し

難儀している時は

その願ひの内容を

しっかりと聞いて吟味し

様子によっては、勸進能や勸進相撲や

その他の多少の見世物などを

日時を限って許し

または神社参詣の道の途中にも

諸人が飢え渴くのを防ぐために

それなりの茶店や

餅や豆腐のような物の販売する場所は

許可する。

徐々に繁盛するようになり

無智放埒にくらせし者

乱行酔狂の余り人をそこなひ

婦人下臆など相手に口論を仕出し

騒動に及ぶ事あれば

其者の罰よりまつ免許せし事を

何の勘かへもなく忽ち停止し

後までも堅くならぬ様に成行事

近比較るかろしき事也

第一乱心同前の者に

大切成る制禁を

こしらへてもらふ様成る物なり

右のたくひの曲者は

其品の軽重をかんかへ急度申付

其者限りに致し置へき事也

かくのことくなれば

のちのち物いひもやみ

自然とおたやかに

世間の潤いにもなるようになれば

必ず一般庶民のみならず、

若い侍たちの内から、

無知で自分勝手に暮らしている者たちが

乱行酔狂のあまりに人を傷つけ

婦人や身分の低い者たちと口論をし始め

騒動に及ぶことがあるだろう。

その者を罰する前に、

その者に許可してきたことを

何の考えもなく即座に停止させ

後々までも

堅く止めておくようになることが

近頃軽々しく起きているようだ。

第一に乱心同然の者に

重要な制禁を作っているようなものだ。

そのような者には

その内容の軽重を考え厳しく言い聞かせ

風俗までもよろしく成ものも
其証拠には

以前より有来りし場所にては
何程貴賤群衆しても

申分さして出来ず

其うへ悪党尋ね者などこれ有節は

政道の一助にも成る事あり

適には行儀正しく

はれなる席にても

不慮なる事有物そかし

何事も心の用ひ様

目の付やう専一也

その者に限って処置すべきである。

このようにすれば、後になって噂も止まり
自然と穏やかになっていき

世間の習わしまで良くなつていくものだ。
その証拠に、

以前から茶店などがある場所では

どんなに身分の違ふ者たちが

集まつてきても

不満を述べることはできないし

その上悪党やお尋ね者などがある場合に

政治の上での監督の一助となる。

適時、行儀正しく人前に出るような席でも

不慮の出来事はあるものだ。

何事も心の用い方

目のつけ方が第一である。

第十三条 先達はあらまほしきこと 1 どんなことでも事情通であれ

一何事によらず不案内にては

人中にて恥をかく事

あけてかそへかたし

是第一万事に氣を付す

うかうかとくらすゆへなり

先他国の者に付合ては

其国の風俗土地山川の事をも

尋ね問ひ

其所々に出生する

万物の善悪までに

心を付るやうにすれば

年々物しりになり

智恵も広く行渡る事也

江戸ゑ度々来りても

京大坂へ上りても其まゝ不案内にて

どんなことであつても

事情に通じていないと

人の中にあつて恥をかくことは

数えればきりが無い。

これ第一に、あらゆることに氣をつけず

ぼんやりと暮らすからである。

まず他の国の人と付き合つて

その国の習わしや

土地山川のことを質問して

その所々に出生する

全ての物の善悪にまで

氣をつけるやうにすれば

年々に物知りになり

知恵も広くなつていく。

江戸にたびたび来ても

物事曾て功者にもならず

何方へも行ずに居て

万事に心を用ゆる者より

かへつてはるかに劣りたる者数々也

他国をしらねは

我國の善悪も知らぬ物也

三人に寄れば師匠の出来るといふも

壱人の仕方のみきを見習ひ

又壱人のよろしからぬを捨れば

兩方ともに我為となる事なれば

心の用ひやうにて

日を追て案内者となるへし

京や大阪に行つたとしても

そのまま事情に通じていないと

物事に決して手馴れた者にはなれない。

どこにも行かず、そこに居ながら

あらゆることに心を働かせる人よりも

逆に非常に劣つたりすることが

数々あるものだ。

他の国を知らなければ

自分の国の善悪も知らないものだ。

「三人寄れば師匠ができる」

というのも

一人の振る舞いの良い点を見習ひ

また一人の良い点を見習ひ

その両方が自分のためとなるので

心の使い方によって

日を追つて事情通となるであろう。

第十四条 芸道は偉大 あらゆる芸事を数年で身につくとは思わぬように

一万の芸能

わつか二三年の間

所またらに習ひて

もはやよほと能致すと覚へ

人もゆるさぬに自慢をし

他をそしりあさける類ひ

一生物の上手になる事なし

惣して人の芸をこなし

他の仕方をわらひ

功者たてをする者に

かしこく香はしきはなし

十に七八まで

仕そこなひはかりにて

未練未熟の不覚悟者としるへし

あらゆる芸事に関して

たった二三年の間所々を斑に習つて

かなり良くできるようになったと

思い込み

人が許しもしないのに自慢をし

他を謗り嘲るような人たちは

一生の間、名人になることはない。

概して、他のものの芸を真似て

他の者の仕方を笑い

自分が上手であるかのように振舞う者に

巧みで美しいことはない

十のうち七八まではしそこないばかりで

熟練が足りない

しっかりとしていない者であると

知るべきである。

第十五条 若者への諫言には若氣の至りをもつて

異なる意見は相手の年齢を考えて

一上たる人へ諫を申すにも

又は親伯父の子や甥に異見をするも
朋友の間にても

其年齢程々を考へて云へき事也

十二三の子ともより

十八九三十とも成たる者

其時々血氣にまかせ

色々の物好き有

しかるに五六十に及びたる者

我身何事をも経て来り

血氣も走り

趣向もしつまりたるころにて

若き輩に何のあちわひもなく

目上の者に諫言を言う時も

または親や伯父の子や甥に

異なる意見を言う時も

仲間の間でも

その年齢を考へて言うべきである。

十二三歳の子どもから

十八九、三十歳位となつた人は

その時々血氣にまかせた

色々な趣向がある。

ところが五六十歳となつた人には

自分自身が様々な経験をしてきて

血氣も定まり趣向もしつまってくるので

若い人達には何の面白みもなく

めつたに異見をくはふれは
たとひ能き事を申きかせても
只料簡もなき無理なる事はかりを
申すやうに存し
表向はかり従ひたる貌にて
内心には腹を立
おかしき事に思ひて
かつて用ゆる事なく
還て背きさかんに成物也
しかれば人に異見せんと思は
先我若き時の事をとくと存し出し
先きの者へも
理を附けほとよくいひきかせ
さてさて
尤千万成事かな
此方の為を大切に思ひての事なりと
自然と感得し

むやみに異なる意見を加えると
たどえ良いことを言い聞かせても
ただ考えもない無理であることばかりを
言っているように思つて
表向きは従つてはいる顔をするけれども
心の中では腹を立て
筋が通らないことと思ひ
決してその意見を用いることはなく
かえつてその意見に
背くことになるものだ。
だから人に異なる意見を示そうと思えば
まず自分が若い時のことを思い出し
目の前の者に
筋道をつけ程良く言い聞かせれば
「道理にかなつていふことだ
こちらのことを大切に思つてのことだ」
と自然と感得し

心を持かへ過りをあらためて
よき人間と成
もはや何事にも
気遣ひなきやうになる事也

心を入れ替えて過ちを改め
良い人間へとなっていき
もはやどんなことでも
気遣いをしなくても良くなるものだ。

第十六条 失敗は発明の母

大器量の者でも若い頃は羽目を外すことはある

一分別工夫ある人にてても

如何成善人にてても

若く盛んなる時は

一旦二旦あやまる事ある物なり

万の事を珍らしく覚へ

遊覧好色勿論の事にて

和漢古今同じ事也

中にも豁達に生れつき

才智有余の者に

猶更ある事也。

是等の類は心の融通より

我非分を能しり人の異見にも附き

忽本心に立かへり勝れたる上者に成り

考え工夫のできる人でも

どんな善人であつても

若く勢いのある頃は

一度や二度は羽目を

外すことはあるものだ。

全てのことに清新さを感じ

遊覧や好色はもちろんのことで

日本も中国も古きも今も同じこと。

中でも度量が大きく生まれつき

高い才能がある者は尚更のことである。

これらのような者は心に滞りがなく

自分自身の

才能のない分野をよく知っており

剩へ心のこなれ諸事の行渡り宜しく
何程の晴なる所作にても
いかなる役義用事にても
夫々に程よくつとめ
重宝至極の人にて
畢竟改めさへすれば
只今迄のあやまり
皆々学問になる事也
いつまでもうかうかと
何の味もなく
改る事もしらすして
一生を取失ひ候者は
元来不才不智にして
悪る強き事を能と覚へたる
大うつけといふ者にて
是等はすこし目の利たる人も
早速見て取事也

他者からの異なる意見も聞き
すぐに本来の心に立ち戻り
優れた上等な人物になり
その上、心細やかで
もろもろのことに心配りをよくし
どのような表立つての公の振る舞いでも
どんな役目や用事でも
それぞれに程良くこなして
とても重宝される人であり
結局は改めさえすれば
それまでの過ちは
皆が皆、学問となつていゝものだ。
いつまでもぼんやりして
何の趣もなく改めることもせず
一生を取り失つてしまふものは
生まれ持つての才能もなく
知恵もないもので

悪いこと強いことを能力だと勘違いする
大馬鹿者であり

これらは、少し人を見る眼のある者ならば
すぐに見破ってしまうものだ。

第十七条 人の命は金では買えんぜ 生命は尊く、常日頃の用心が肝要

一大身小身ともに

人数不足しては万事に付間も合す
気のどくなる事のみ也

さりながら省略專一の時節ゆへ
随分不自由

かんにんはかりしてくらす事也

尤召仕等程々よりは減少し

歴々たる人猶以て其通りにて

五人のものは三人に成り

三人の者は壱人にて

役義をもつとむる様に成たり

其中吉凶又は大饗の折

人の多く入候時は

外の役の者をもそれぞれに仕埋させ

彼是とすれば

禄高が多く身分の高い人でも

身分が低く禄高が低い人であつても
人数が不足しては

あらゆることに間に合わず
気の毒なことである。

そうであつても

省略に専心するこの時節だから

随分と不自由で堪え忍んでばかりで

暮らしている。

もつとも召使なども

必要な人数より少なくさせ

身分の高い人も

なおさらにその通りであつて

五人の者は三人になり

三人の者は一人となつて

大方に間も合様になる物也

唯火事のせつ急成折

思慮する間もなき時分

人数すくなくしては

何程働きても

中々手のとゝかぬ事なり

其うへ平生何千何百と積り置ても

病人数多これ有か

又は私用の為に他行する者もありて

ぞんしのほか

式十人三十人有とおもふ所多

わつか五人十人ならては

つかはす事ならぬ様なる儀

かならず有事也

さあれはとて其為はかりに

人数の余慶こしらへおく事も

平生は無益のやうに思はるゝなれば

その役目を務めるようになってきた。

その中でも吉事や凶事の大饗応のような

人もたくさん必要である時に

他の役目の人達を

それぞれに補い穴埋めし

あれこれとやりくりすれば

大方ほとんどもが間にあうものだ。

ただし火事のような急な場合、

思い考える時間もないときには、

人の数が少なくて

どれほど働いたとしても

なかなか処理できない。

そのうえ常日頃から何千何百という

人数を用意しておいても

病人が多数いるとか

または私用で

どこかに行っている人もいて

常々の覚悟をよくいたし
風烈しき日は別して用心堅固にし
土蔵等かねてより丈夫に修覆し
あわて騒がぬ様にこゝろ急
有合候人数は随分火表急立まはり
防がせ見るやうに有たきものなり
多からぬ人数を方々急わけて
火も防がせ道具の支配も致させ
いろいろの事につかひては
何れの方の間も合す
死傷の者多く出来るより外有まし
たとひ千金をのへたる物にても
かろき人間老人の命にはかへかたし
是等の類
皆々上たる者の勘弁なく
不裁許より起る事也

思いのほかに二十人三十人いると
思っている所に
わずかに五人十人しか
送ることができないことも
必ずと言って良いほどあるものだ。
だからといって、そのために
人数を余分にしておくのも
日頃は無益のように思われるので
常々の心構えをしっかりとし
風が非常に強い日は
特別に用心をしっかりとし
土蔵など普段から丈夫にしておいて
慌て騒がないように心得て
その場に居る人達は火の前に立てて
防ぐようにありたいものだ。
多く無い人数をあちこちに振り分けて
火も防がせ、道具の管理もさせるなど

いろいろなことに使っては
どの方向も間に合わなくなり
死傷者が多く出てしまうことにな
ってしまふ。

たとえ千金をのべて作ったとしても
身分の低い者であつても

人間一人の生命には
変えることはできない。

これらのようなことは
皆が皆、上に立つものが考えることもなく
決断することもないために起きることだ。

第十八条 何事も庶民目線で 世間の事情によく通じ深い愛情を示せ

一 数万人の支配をする者をはしめ

千人百人乃至

五人三人壹僕召仕輩に至る迄

能々下の情に通達し万事に行渡り

夫々の所作をも

自分に仕て見ずしては叶はさる事也

貴人は暑き時分は

広く涼しき所に住居し

食物も清く口に叶ひたる物を食し

寒き時は衣服あたゝかに着る上に

火燧にあたり火鉢をおき

夜具幾重も重ね

美味のあたゝかなるを飽まで食し

他出する時は馬駕輿に乗

供廻り大勢召連

数万人を支配する者を始め

千人百人から五人三人

一人の従者召使などにいたるまで

よくよく世間の事情に通じて

あらゆることに目配せができて

それぞれの行為を自分自身がしなくては

よく分らないものである。

地位の高い人は、暑い季節には

広くて涼しいところに住み

食べ物も清潔で口に合うものを食べ

寒い時には衣服を暖かく着た上に

炬燵にあたり、火鉢を置いて、

寝具を何重にも重ね合わせ

美味しくて温かな物を満足するまで食べ

外出するときは馬や駕籠に乗って

何に一つ事の欠る品なし

中より以下の者は其品

すこし充はかはれども

常々心の外の義理に欠き

昼夜苦心ばかりにてくらし

下々にいたりては

衣服食物をはしめ

詞に述べられぬ不便の事のみ也

齊の管仲か

衣服足て礼節を知

といへるは古今の名言なるよし

故に能下のわけをしらすしては

何程慈悲のこゝろありても

推量の分にて中々とゝかぬ事なり

万の仕方存せずしては

物の申付やうまで相違する

子細は北条氏政の野陣せられし時

大勢召し連れて、何も不足したものはない。

身分が中位以下の人は、その内容は

少しは充足はしているけれども

常々には

残念にも義理を欠かざるを得なく

一日中苦心ばかりして暮らして

身分の低い者たちは

衣服食物を始め、言葉にならないほどの

不便をしてばかりいる。

齊の管仲が

「衣服足て礼節を知る」

と言ったのは昔にも今にも名言である。

だからこそ、

よく世間の事情を知らなければ

いかに慈悲の心があっても

推測ばかりで、なかなか届くものではない。

あらゆる方法を知らなければ

百姓供麦を茹て持行を見

あの麦にて

おつ付麦飯をこしらへ出せ

と申されし一ヶ条にて

大に人に見おとされ

終には国をも失はれたり

氣を付されば斯の類不断の事なり

さりながら下の情に能通し

物の働までも知る様に成て

還つて下の痛み苦む様に成も有

是等は元来不仁私欲甚しく

自分の奢を極る邪念より起りて

慈仁の本心より出ざるゆへ也

物の言い方まで異なってしまう。

具体的には、

北条氏政が野陣したときに

百姓が麦を刈って持っていくのを見て

「あの麦で、

すみやかに麦飯を作らせて差し出せ」

と言われた一言であり

大いに他者から軽蔑され

しまいには国さえも失ってしまった。

氣をつけなければ

このようなことは絶えない。

しかし世間の事情に通じて

物の値段まで知るようになっては

かえって世間に

痛みや苦しみがある場合もある。

これらは本来、

深い愛情もなく私欲が激しく

自分の奢りが極まった
邪念より起こるもので
深い慈愛の本心から
出ていないからである。

第十九条 天下の政治は緩急自在で

国の改革はゆつくりと 普段の用件は速やかに

一 凡そ人間貴賤に限らず

命長からずしては

何事も成就する事なし

聖賢の教戒

千万年の後迄も尊び用ひられ

文武の明君国天下をたもち

長久の基ひを開き給ふも

皆寿命の長きより

成しおゝせらるゝ事也

士農工商の相応に本意を達し

諸芸者の上手名人になるも

年月久しく積り怠らぬ故也

今日国を治る者人の為国の為

そもそも人間は身分の貴賤に限らず

生命が長くなくては

何事も出来上がることはない。

聖人や賢人の教えや訓戒は

千万年の後まで尊び用いられ

文武の名君が国や天下を平和に保ち

長く久しくするため

基礎を作られたのも

皆、寿命が長かったからできたのである。

士農工商の身分にあった願いが叶い

諸芸者が上手名人になるのも

年月を長くかけ

努力工夫を怠らないからだ。

利益ある事にても
急にこしらへたる儀は
衆人のこゝろさはぎ服せずして
存する様にならぬものなり
そろそろと年数かゝりて
とくと成し熟すれば
隅からすみ迄滞りなく
自然と風俗までもよろしく
いつ迄も持こたへ
後々は法度の世話なくても
事済様になるへき事なり
人の痛み難儀なる筋は
速に改め直し
公事沙汰願ひ訴訟并日用取扱の事は
食をくふ間も遅くせざるやうにと
存し候はずしては
さしつかへのみにて

今日、国を治める者が、
人のため、国のために役立つことでも
急に作り上げたものは
人々の心が騒いで心服できず
思うようにはならない。
ゆっくりゆっくりと年数をかけて
念を入れて成熟させていけば
隅から隅まで滞りなく
自然と世間の事情まで良くなっていき
いつまでも続いて
後々には法令に頼ることをしなくても
ことが済むようになるであろう。
人の痛みや難儀がある場合は
速やかに改め直し
公務、取決め、願ひ、訴訟
ならびに普段に取り扱うことは
食事を取る間でさえ遅くならないように

人の迷惑甚しく

無益の費も出来る事也

前々井の内へ踏はつし

はまりし者有し時

近所の者共井の際へ立集り

色々と相談し

古例など考へて居る内に

其者はれふくれて死し

後迄の笑ひ種と成しと聞及ひたり

理にくらく片意地に覺ゑたる上には

是等のたくひ

いか程も有へき事なり

心がけなくてはならない。

さしつかえるばかりでなく

人への迷惑もはなはだしく

無益な出費にもなるからだ。

以前に井戸の中に踏み外し

はまってしまった人があつた時

近所の人達が井戸の周りに集まってきて

色々と相談し、

過去の例などを考えているうちに

その人は水で膨れ上がって死んでしまい

後々までの笑い話となつたと

聞き及んでいる。

筋道を考えられず片意地をはるような

上に立つこれらのような者は

どれだけでも居るようである。

第廿条 改革は文殊の知恵で 自分ひとりではなく良き補佐が大切

一 改め直す事能とはかり心得ては
又々大なるたかひも
かならず出来る事なり
さしたる事もなき品までに
おもわく生し
国法もかろかろしく成り
手厚き事なきやうにも成行へし
とかく我壻人の
思慮分別はかりにては
あやうき事なれば
諸人の智を執用ひ
理非問答の
能き輔佐なくしてはならぬ事なり
百姓町人ふせいさへ
善き子有か能き手代を持たる者の

改め直すことが良いことばかりと
思い込んでいては
またまた大きな間違いも
必ず起きるものだ。
たいしたこともないような内容にまで
考えを起こし
国の法令も軽々しくなり
親切丁寧でなくなってしまうだろう。
とにかく自分ひとりの
考えや分別だけでは
危ないことなので
諸々の人の知恵を用い
事の正しい間違いを判断するための
良い補佐がなくてはならない。
百姓や町人などのようなものでも

万事はかの行にて知るへし

善き子どもがいるか
よき手代を持っている者たちは
あらゆることにうまく行くということを知
るべきである。

第廿一条 「まあええがやあ」が臣下に対する主君の心得

古参新参・男女等を問わず平等に深く愛情を示せ

一上より下に至るまで

私を捨天理にかなふやうにと

朝暮わするゝ間なく工夫すへし

暫もおこたれは

邪念忽ち生しやすし

中にも上たる身のうへに

専ら心を付へき事あり

国郡数多領し

数万の人を召仕ふ事

先祖より代々限りなき厚恩也

さあれば譜代相伝の者共

めくみ養ふは申すにも及はず

其代々に取立恩顧を蒙りし輩

身分の高い者から低い者まで

私欲を捨て天の道理にかなうように

朝晩忘れることがないように

工夫すべきである。

少しでも怠けると

邪念がたちまちに生まれやすい。

中でも身分の高い者がひたすらに

気をつけなければならないことがある。

国や郡など数多の領地を治め

数万人の人を召し使うという事は

先祖代々のこの上もない厚い恩である。

だからこそ代々仕えてきた者達を

恵み養うのは言うまでもなく

男女にかきらす皆々同し事也
上のこゝろは毛頭隔なくとも

万端心得たかひて身を引

はからすも不忠不義に似たる輩は
自分自分の身より出せる事にて
是非に及はず

但上の存念いまいたらさる内は
かくの類ひも有ましき物にてなし
しかるに部屋住みの時分

思慮とくと熟せず

こゝろまわりて

我への仕方おろそかなると存たかへ

正体もなき事を宿意にはさみ

其返報をなすへきとおもふたくひ

是全く匹夫の所存にて

言語の述べたき浅ましき心持なるへし
唯々親疎なく

各代に取り立てられて

恩顧を受けた人達へも

男女の別なく皆を

同じように恵み養わなければならぬ。

上に立つ者の心に分け隔てなくとも

すべての理解を間違えて身を引き

思ひもよらず

不忠不義のようになつた者達は

自分自身の身から出たことであつて

やむを得ないことである。

ただし上に立つ者の考えが

未塾な場合も

こうしなことがないわけではない。

そうであるから、部屋住みの頃に

考えが十分に成熟もせず

心はあちこちと巡つてしまひ

自分への扱いが疎かだと考え違いをし

平等に憐愍せずしては

かなはざる儀

第一孝行の真実

天理の本意より生ずる事也

我斯のとおりならば

子々孫々も又々右の心を受續て

長久おのつから天地と共に

ひとしかるへし。

ありもしないことを長年の恨みとし

その仕返しをしようとするような者は

これはまったく

道理を分け前ない者の考えであり

言葉にならないほど下劣な心持ちだ。

ただただ

親しいとか疎遠であるとか

いうのではなく

平等に愛情を示さずには

いられないことは

第一に人を大切に思うことの誠である。

天の道理の大本から生まれるものである。

自分自身がこのとおりであるならば

子孫たちもまたそのような

平等な深い愛情の心を受け継いで

自然と、天地と等しく

長く久しくあるであらう。

結文

右此一巻書述し所以は
条数を以て急度号令せしむるに非ず
人々常に座右にさし置
具に我本意を知り
いづれも此こゝろ持を失はず
熟読翫味するの上
自ら心も正しく身も修り
政道の助にもならむ事を欲し
重ねて数語を以て
之を後に附する而已 印

以上、この一巻を書いた理由は
書かれた条文で
急いで号令をかけたわけではない。
人々に常に座右に置いてもらって
詳しくに私の本心を知ってもらい
皆がこの心がけを忘れることなく
熟読し、よく理解してもらえれば
自らの心も正しくなり身も修まり
政治の助けになるであろうことを
望んでいる。
重ねてわずかな言葉を用いて
これを最後につけくわえた

印

訳者あとがき

この『温知政要』は、尾張七代藩主源贈従二位権大納言徳川宗春公（章善院）の名著。彼が尾張藩主就任直後に執筆されたものです。当時としては斬新なもので、自分の政治宣言を文字にして配下に配った例はあまりありません。内容的には一読いただければおわかりいただけますが、人間性を見つめ、生きるということの意義を前提に、分かりやすい言葉で記されたものです。

このように、崩し文字を活字にさせていただき、さらに現代語訳をさせていただいた宗春公に、厚く御礼申し上げたいと思います。尚、この本の原本は蓬左文庫所蔵の享保十六年の初版本であり、いくつかの写本を校合しました。私はこの分野の専門学者ではないので、校合の結果の出入に関しては全て割愛させていただきました。また各条のタイトルは、安田文吉南山大学教授のものに、付け加えさせていただきました。ここに安田教授に深く感謝したいと思います。現代語の不明瞭な点は、今後の課題です。宗春ロマン隊、特に事務局の舟橋親子・清水・西村・妻リツの皆には随分とお世話になったので、改めてここに感謝を申し上げます。また蓬左文庫の職員の方々には随分とご迷惑をおかけしたこと、ここにお詫び申し上げます。

この原文と現代語訳、さらに別冊の宗春関連の私の資料冊子とが、宗春公を理解し、その想いを現代に活かすことに役立てれば幸いです。

平成二十二年十月二十一日

於 書齋 宗春ロマン隊 遊歩和尚

忍